



アポビッテ *ApoBitte!*

コミュニティファーマシーの創造を支援する情報誌

Vol. **9** 2022

特集 第9回 コミュニティファーマシーフォーラム **ハイスリッド** 開催報告



CONTENTS

- 03 【特集】
第9回コミュニティファーマシーフォーラム [ハイブリッド] 開催報告
- 04 主催者挨拶／プログラム
- 05 <特別講演 1>
 - ① デジタル庁の創設と社会全体のDXの推進
～マイナンバー、マイナポータルとデータヘルス計画～
 - ② 社会のハブとしてのビヨンドファーマシー (未来の薬局)
- 08 <特別講演 2>
病院の外で医療をつくる
- 09 <基調講演>
 - ① 薬局における服薬フォローDX ～IoTおくすりカレンダーの有用性～
 - ② 薬局で行う『脳卒中啓発・予防サービス』としての心電図測定事業
～「健康応援スポット」認証制度について～
 - ③ ポリファーマシーの副作用発現リスクを評価するツール
～POLSETの臨床応用と有用性
- 12 <JACP会員発表>
薬局としてDX化・機械化への取り組み
 - ① グリーンメディックの考えるDXと保険外サービス
 - ② ドイツ薬局におけるDX化・機械化
 - ③ 和歌山県で初めてBD V maxを導入
- 13 <プログレスセミナー>
インスリン自己注射患者への継続的なフォローアップに必要な視点と行動
～スマートインスリンペンの可能性～
- 14 JACP会員ポスター発表
- 16 ブース出展企業
- 17 WEB広告出稿企業
- 18 フォーラム協賛企業／フォーラム宣言
- 19 JACP 2021～22年の活動報告



今号の表紙写真
ドイツ・ロマンチック街道の北の起点となるヴェルツブルクの街にある薬局 ENGEL APOTHEKE。その名を象徴するような金色に光る天使像が目玉を引くが、エントランスの手すりのデザインも聖蛇と聖杯を持つ天使像をかたどり、素敵であった。

ApoBittle! vol.9
発行日：2022年9月20日発行
価格：定価400円＋税
発行所：一般社団法人
日本コミュニティファーマシー協会
〒153-0063 東京都目黒区目黒1-6-23
TEL:03-6303-9181 FAX:03-5759-1724
発行人・編集長：吉岡ゆうこ
デザイン：ヨシオカデザインルーム
印刷・製本：三昇堂印刷株式会社

<広告掲載企業>
15 ニプロ
20 大塚製薬工場



第9回 コミュニティファーマシーフォーラム [ハイブリッド] 開催報告

2022年7月24日(日)、「第9回コミュニティファーマシーフォーラム」を開催しました。今回は第6回以来、3年ぶりに東京都千代田区の秋葉原コンベンションホールを使用、さらにWEBでの視聴もできるハイブリッド開催となりました。新型コロナ「第7波」のただ中、会場参加は100名限定、参加者全員の抗原検査を行って万全の感染対策で臨み、久しぶりの再会を喜び合う声が聞かれました。101名の会場参加申し込みをいただきましたが、本人や家族、同僚の感染等でWEB参加に変更される方もあり、会場での参加は80名、WEBでの参加は約200名でした。

今回のメインテーマは「グレート・リセット DXで可能となる多職種連携&未来の薬局」。デジタル技術を活用してヘルスケアの質を上げる社会と医療、薬局のあり方について、さまざまな立場からの提言や現状のレポートをいただきました。講演の他、会員によるポスター発表、企業による展示も、会場開催によって久々の実施が叶いました。大きなリセット後、新しい世界を築く準備となったこのフォーラム、当日の内容を要約してご報告いたします。



グレート・リセット | DXで可能となる多職種連携 & 未来の薬局

主催者挨拶

コロナ禍になってからの2年間、昨年と一昨年(第7回と第8回)はWEBのみの開催でした。第9回のフォーラムは face to face、会って皆様のお顔を見たいとハイフット開催にいたしました。

昨年のフォーラムで、「コロナに負けず連携からタッグ」へとフォーラム宣言を行い、この1年間活動してきました。会員のポスター発表は、コロナに負けず頑張った薬局の発表ばかりです。

そして今回のメインテーマは『グレート・リセット DXで可能となる多職種連携&未来の薬局』。グレート・リセットは2021年のダボス会議のテーマです。今の社会全体を構成するさまざまなシステムを、一旦すべてリセットすることを示します。私どもは「人々の幸福を中心とした経済」を「地域住民の幸福を中心とした医療」に読み替えてテーマとしました。

リセットはそれぞれに考えるところがあるかと思えます。今回のフォーラムを通じてDXで可能になる多職種連携と未来の薬局を感じていただけたら幸いです。

一般社団法人 日本コミュニティファーマシー協会 代表理事 吉岡ゆうこ

プログラム

【特別講演1】

座長：乾賢一(京都大学名誉教授/京都薬科大学名誉教授・客員教授/JACP 理事)

デジタル庁の創設と社会全体のDXの推進
～マイナンバー、マイナポータルとデータヘルス計画～

講師：吉田宏平(デジタル庁 参事官 総括・総務担当)

社会のハズとしてのビヨンドファーマシー(未来の薬局)

講師：高橋博樹(株式会社日経BP 総合研究所 主任研究員)



【基調講演】

座長：浜田康次(アポクリート株式会社 顧問/JACP 理事)

薬局における服薬フォローDX ～IoTおくすりカレンダーの有用性～

講師：佐古卓人(H&H CONNECT株式会社 取締役)

薬局で行う『脳卒中啓発・予防サービス』としての心電図測定事業
～「健康応援スポット」認証制度について～

講師：岡崎光洋(一般社団法人スマートヘルスケア協会 代表理事)

ポリファーマシーの副作用発現リスクを評価するツール
～POLSETの臨床応用と有用性～

講師：佐藤憲一(コスモス医薬情報AI解析研究所 所長)



【プログレスセミナー】

座長：篠原久仁子(株式会社フローラ 代表取締役/JACP 理事)

ノボ ノルディスクにおけるデジタルヘルスの取組み

講師：井戸根裕之(ノボ ノルディスク ファーマ株式会社 糖尿病肥満症事業本部
インスリンマーケティング部デジタルヘルスプログラムリード)

インスリン自己注射患者への継続的なフォローアップに必要な視点と行動
～スマートインスリンペンの可能性～

講師：朝倉俊成(新潟薬科大学薬学部臨床薬学教育研究センター センター長・教授)



【JACP会員発表】

座長：山村重雄(城西国際大学薬学部 特任教授/JACP 理事)

薬局としてDX化・機械化への取り組み

①グリーンメディックの考えるDXと保険外サービス
多田耕三(一般社団法人豊中市薬剤師会/株式会社グリーンメディック)

②ドイツ薬局におけるDX化・機械化
アッセンハイマー慶子(セントラルアポテーケ/JACP 理事)

③和歌山県で初めてBD V maxを導入
川原淳(共和メディカル株式会社)



【特別講演2】

座長：島田光明(アピラメイト株式会社 代表取締役/JACP 理事)

病院の外で医療をつくる

講師：石井洋介(株式会社omniheal 代表取締役/おうちの診療所 目黒・中野 医師/日本うんご学会 会長)



特別講演1-1

デジタル庁の創設と社会全体のDXの推進 ～マイナンバー、マイナポータルとデータヘルス計画～

座長：京都大学名誉教授、京都薬科大学名誉教授・客員教授/JACP 理事 乾 賢一
講師：デジタル庁 参事官 総括・総務担当 吉田宏平

吉田宏平(よしだ・こうへい) 1994年郵政省(現総務省)入省。情報通信行政に従事。2015～17年、医療分野のデジタル化を厚生労働省と連携して進める。内閣官房IT総合戦略室出向を経て、2021年9月デジタル庁創設と同時に参事官に就任。

座長より

最初の講演はデジタル庁の参事官でいらっしゃる吉田宏平様からいただきます。デジタル庁創設の経緯、マイナンバーやマイナポータルの具体的なサービス内容などをお話しいただきます。薬剤師がデジタルをどのように展開していくか、考える上で多くのヒントとなると思います。



座長 乾賢一

マイナンバーカードは現在普及率44%くらい。2022年度中にほとんど全ての国民が持つ状態になることを目標にしています。

マイナポータルは、国民一人一人のさまざまな情報を集約したサービス窓口です。マイナンバーカードで認証した本人がネットを通じて見ることができます。まだ使い勝手はよくなく、これを改善していくことは、現在我々が負っている宿題です。マイナポータルで取得できる主な情報は図2にまとめています。利用者の同意を得て、民間のさまざまなサービスで利用者本人の情報を見ることもできます。今後いろいろなサービスが広がっていくでしょう。

講演要約

今日は貴重な機会をいただきありがとうございます。デジタル庁の設立とマイナンバーとマイナンバーカードの概要、さらに、医療全体、薬局業務において、マイナンバーカードを介したデジタルデータをどのように活用していくか、お話しします。

マイナポータルを活用したサービスが広がっていく

決済や決定にハンコが必須となること、FAXの多用など、新型コロナによって、デジタル化が進んでいない非効率な社会状況が露呈されました。そこでデジタル化推進のため、デジタル庁が設立されました。政府の縦割りの弊害をなくし、各省庁に対し司令塔となってデジタル行政を進め、自治体のシステムの共通化などに尽力しています。主な業務内容は図1にまとめています。

マイナンバーとマイナンバーカードについては、まず両者は別物ということ認識する必要があります。マイナンバーは、国と自治体、年金関係、医療保険者関係での情報のやりとりを行うため、住民一人一人に付けられたIDです。マイナンバーカードは、サービスを受ける際に、間違いなく本人と確認できる「カギ」となるものです。カードをかざし4桁の暗証番号を入れることで、本人であることを確認します。スマートフォンで読みこむことができ、カードを持つ本人が自分の欲しい情報を、随時取り出すことができます。



図1/デジタル庁の業務内容



図2/マイナポータルで取得できる主な情報

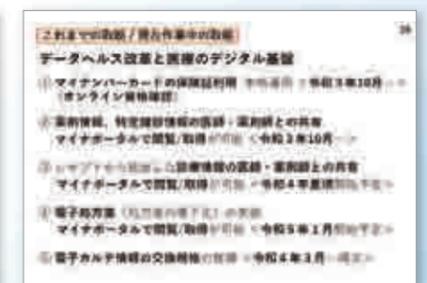


図3/医療分野におけるデジタル活用の動き



特別講演1-2

社会のハブとしてのビヨンドファーマシー (未来の薬局)

座長：京都大学名誉教授、京都薬科大学名誉教授・客員教授/JACP 理事 乾 賢一
講師：株式会社日経BP 総合研究所 主席研究員 高橋博樹

高橋博樹(たかはし・ひろき) 1991年、早稲田大学第一文学部卒業、日経BPに入社。インターネット草創期のビジネスモデルの開発、ICT・建設・人事などさまざまな分野を担当する。2015年、日経BP 総合研究所発足と同時に戦略企画部長に就任、2022年4月から現職。

座長より

日経BP 総合研究所 主席研究員の高橋博樹様にご講演いただきます。日経BP 総合研究所の立ち上げ時から、高橋様は、企業、地域の課題は社会課題と重ねて解決することを理念とされ、既存メディアの枠を超えたプラットフォームを生み出し、さまざまな手段を講じてムーブメントを醸成することを得意とされています。「社会のハブとしてのビヨンドファーマシー」という演題は、コミュニティファーマシー協会の活動にとって「そのものズバリ」のテーマです。非常に示唆に富んだご講演となると期待しています。

講演要約

日経BPの高橋と申します。本日は、私が中心になって進めている「空間×ヘルスケア2030」というプロジェクトについてお話しします。

まず日経BPについて簡単に説明します。日経BPは、日本経済新聞社100%出資の出版社です。一般向けの雑誌もありますが、医師、建築士などその分野の専門家に定期購読していただく専門誌を主力としています。雑誌を34、ネット媒体を24、合わせて58の専門メディアを展開しています。日経BPは、専門領域に特化してきた知見、人脈、情報発信力を活かして、2015年に総合研究所を立ち上げました。以来、企業や自治体からご相談を受けて、さまざまな課題解決をしてきています。

未病を改善し、健康で幸福な人生100年時代へ

今進行中のプロジェクト「空間×ヘルスケア2030」の目的や目標を図1にまとめています。健康で幸福な人生100年をつくることを目的に、目標を「未病の改善」に置いています。「空間×ヘルスケア」では、住宅、学校、オフィス、モビリティといった空間の中で、健康に資するハード・ソフトあるいは考え方を入れ込んでいくことで未病改善ができるのではないかと考え、2030年にこれらを社会実装できるように進めています。

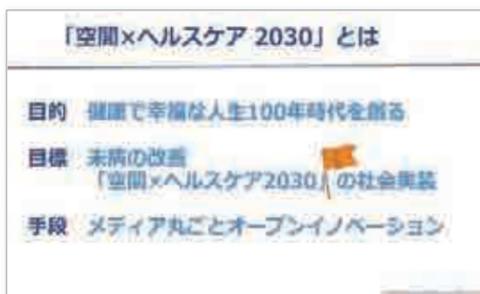


図1/「空間×ヘルスケア2030」の概要



実装する主役は実業領域にいらっしゃる企業や自治体です。私たちはメディアの機能をフルに使いながら、社会実装するまでいろんなプレイヤーの方々に伴走させてもらうというのがこのプロジェクトです。具体的には、健康領域での新しいビジネスの動きを取り上げるWebメディア「Beyond Health」において、「空間×ヘルスケア2030」を進めるにあたって有用な多くの情報を収集・発信、そして人的な交流を行っています。

「空間×ヘルスケア2030」では、さまざまな人の反応を促進することを企図し、「ビジョナリーフラッグ」と呼ぶ、ビジョンを可視化した旗を掲げています。そのため医療に全く興味がない人にも、一目で見てわかってもらえるようなイラストに落とし込んで広く発信をしています。未来の空間として4つの空間とその機能を再定義するイラストを4つ作成しました。住宅、モビリティ、ワークプレイス、そして、薬局です。この中から、住宅、薬局についてお話しします。

最新の技術を使い、疾病の早期発見を実現する住宅

まず住宅、「ビヨンドホーム」と呼んでいます(図2)。未来の住宅はどうなると未病の改善が進むのか。この中では生活の基盤を再定義しています。

たとえば、左上にあるお風呂場であり、浴室、脱衣所は、家の中の

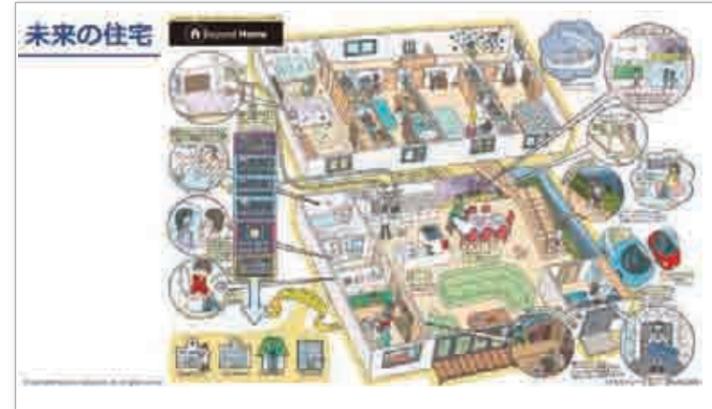


図2/ビヨンドホーム・未来の住宅

空間で一番危ないところといえます。転倒、ヒートショック、溺死等で、正確には把握できませんが、毎年2万人以上の方がお風呂場で亡くなっていると推計されています。これを防ぐためには、脱衣所から浴室、浴槽中にある間のバイタルデータを見ることが有効です。異変があったらアラートを出し、家族の方が救出に向かう。一人暮らしであれば警備会社と契約して救出してもらおう。こういったことで2万人の命の多くが助かるのではないかと考えています。

また、スマートミラーといって、鏡越しにバイタルデータを取れる製品も出てきています。洗面所での洗顔、化粧、髭剃りの際に、バイタルを定点観測することができます。そして、尿や便は人間の体の調子を見るのには宝の山のようなものです。トイレでさまざまなスクリーニングを行って、疾病の早期発見につながるデータを蓄積することも可能です。スクリーニング技術は現在さまざまに発展しています。たとえば、がん罹患している方の尿には寄って行ってそうでないと逃げるという特性があると言われる線虫、採血いらずで、特殊な赤外線に当てて血糖値を測定する技術や、ウェアラブルデバイスの発達もあります。

こうしたさまざまなテクノロジーを病院の外側の空間に実装することで、未病の改善を推進していくことが可能です。その他、住宅では、フレイル対策や睡眠の質の改善など、さまざまな技術の実装が考えられます。

データに基づき、地域住民にアドバイスのできる薬局

さて薬局、「ビヨンドファーマシー」です(図3)。このプロジェクトでは、薬局が新しい機能を持つことで、未病の改善を進めるための大事なインテリジェンスハブになると考えています。ここで必要な再定義は薬剤師さんです。

図3の右上に2人描かれているのが、ビヨンドファーマシーの薬剤師の姿です。話しかけやすい服装ですね。一般の人よりもはるかに医学知識を持っている薬剤師が、地域住民に対し発病する前の段階でいろいろなサポートを行うことを

想定しています。私たちは「ヘルスケアマイスター」と呼んでいます。つまりかかりつけの健康アドバイザーです。薬剤師さん全員がヘルスケアマイスターになるのではなく、志願した方がなるというのではないかと考えています。ヘルスケアマイスターの活躍には図3左上にあるカフェスペースのような、相談できる空間の設置も大切です。わかりやすくロボットを描いていますが、ヘルスケアマイスターである薬剤師の時間をしっかり作るためには、薬のピッキングは自動化でよいのではないかと、という提言もしています。

また、カギになるのがデータの管理です。たとえば、さきほど見たような、ビヨンドホームでバイタルやスクリーニングデータを持ち込んで相談したり、自宅と薬局を結び、何かしらの兆候が出てきたときには、薬剤師がオンラインで、睡眠、食事などのアドバイスをします。重篤化する病気に繋がっていると判断すれば、医療機関にスムーズにつなぐ、といった方法もあり得ます。薬剤師から医師に、データとともに「こういう方が診察を受けに行きます」と直接連絡できれば、医療負荷も軽減できます。

また、ビヨンドホームのスクリーニングができるトイレが開発されたとしても、はじめはかなりの高額になり、それが各家庭に届くまでには、時間がかかります。個人で持つのが不可能なスクリーニングできる機器を薬局に置いて、地域の方がふらっと立ち寄って活用できるという方法も有効です。

ビヨンドファーマシーの姿は、単に仕事が広がるだけだと見えるかもしれませんが、私は新しいビジネスの創出だと考えています。たとえば、未病を改善するために、保険契約のように毎月お金を払ってもよいと考える人は現在でも確実にいます。薬剤師の能力とスクリーニングなどの技術によって、薬局を基点とした新ビジネス創出が可能だと考えます。

ビヨンドファーマシーは、一つの提言です。これが正解なのではなく、もっと違うこともできるでしょう。未病の改善が進むような他のアイデアを皆さんからいただければ、ビジョナリーフラッグに描いていきたいと思っています。ぜひご意見をお聞かせください。ご清聴ありがとうございました。

図3/ビヨンドファーマシー・未来の薬局





特別講演2

病院の外で医療をつくる

座長：アピラメイト株式会社 代表取締役 / JACP 理事 島田光明
 講師：株式会社omniheal 代表取締役 / おうちの診療所 目黒・中野 医師 / 日本うんこ学会 会長 石井洋介

石井洋介 (いしい・ようすけ) 高知大学医学部卒業後、2012年横浜市立市民病院外科・IBD科に勤務。2013年日本うんこ学会設立。2015年厚生労働省医政局、2016年同老健局に勤務。2017年臨床現場に活動拠点を戻し、2019年デジタルハリウッド大学大学院を卒業、株式会社omniheal創設。2020年おうちの診療所を開業。

座長より

講師の石井洋介先生は、行政、臨床、会社経営と幅広く活躍です。2020年に開設された「おうちの診療所」には、私もお邪魔したことがあります。パソコンが所狭しと並び、診療所らしからぬといえますが、診療所の定義の書き換えがまっすぐに行われているのではないかと印象を受けました。ご自身も通常の医師以上のものをお持ちの「お医者さんらしからぬ」先生です。



座長 島田光明

講演要約

石井と申します。簡単に自己紹介をしますと、医師を目指したきっかけは15歳で潰瘍性大腸炎を発症したことでした。人工肛門となりましたが、Jバウチという回腸嚢を作成する手術を受けて人工肛門を閉じることができた経験から、医師のかっこよさに目覚め、21歳で医学部を目指しました。研修修了後、キャリアのスタートは、手術を受けた横浜市立市民病院の外科からでした。臨床の他、厚生労働省でデータ利活用の推進に携わった経験もあり、大学院でテクノロジーとクリエイティブを学び、デジタルヘルスやコミュニケーションデザインの分野にも力を入れています。現在は2か所の在宅診療所と夜間外来診療所で診療する他、ヘルスケア領域でのモノ作りなどを行っています。

大腸がん早期発見のため、ゲームを通じてポップに啓発

私たちの展開するサービスの一例を紹介します。外科医時代、誰が手術をしても助からないという大腸がん患者さんに出会い、医療機関にかかる前での早期発見の必要性を痛感しました。大腸がんの初期症状は、便が細くなる、血便が出るなど、便の出方、うんこの出方の変化です。そのためがん検診では便潜血検査を行います。が、そもそも、患者さんが自分の便に興味を持たないかぎり、症状に

気づけないという問題があります。

そうした課題を、エンターテインメントを通してポップに啓発することができないかと考えて、うんこを啓発する「日本うんこ学会」を設立、その活動の中で、スマホゲーム「うんコレ」を作りました。うんこの報告をすると、武器や味方をゲットできてゲームが進むという腸内細菌を擬人化したロールプレイングゲームです(図1)。

図2のように、「キャンベス様」に「キャンペン」として便を報告しますが、便が細くなったり、下痢や便潜血が続くなど危険な徴候があると、キャンベス様から受診をお勧めされます。「うんこ」というワードはTwitterで流行りやすいというデータが以前からあるのですが、「うんコレ」は多数つぶやかれて拡散し、広告を打たなくてもユーザーが増え、Twitter上で「うんコレで病気が見つかった」という報告もされています。キャンペンで報告を受けた便性状のデータをまとめたものが図3です。2021年11月時点で水様下痢の出現率は1.83%、最新データでも1.61%でした。データ数が増えても同じような割合だったことから、日本人の2%弱は常に水様下痢をしていると思われます。

ゲームを続ける人が、健康そのものにも興味をもって

「うんコレ」は、大腸に興味がない人が、便の報告をしてそれを維持していくことを意識して作っています。「ポケモンGO」などはヘルスケア分野で論文も出ていますので、今後医療分野のゲーミフィケーションの例は多く出てくるでしょう。そうした論文では、ゲームでモチベーションを維持できるのは6週間くらいまでで、その後続く人は何か別のモチベーションに切り替わっていると言います。「うんコレ」で言うと、ゲームをきっかけに「便を見ることって大事なんだ」と思った人がゲームを続け、便秘がちな人など便に問題を感じている人の方が続きやすいという発見もありました。

医療の中だけでなく、医療の外からも健康維持に有効な働きかけをすることで、少しずつ医療の未来を拓いていけるでしょう。今後もそうした活動をさまざまに展開できればと思っています。



図1 / スマホゲーム「うんコレ」の概要



図2 / ゲーム上で便の報告をする「キャンペン」

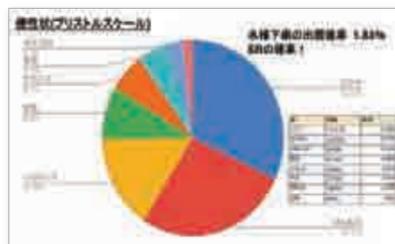


図3 / 「キャンペン」で得られた便性状のデータ



基調講演1

薬局における服薬フォローDX ～IoTおくすりカレンダーの有用性～

座長：アポクリート株式会社 顧問 / JACP 理事 浜田康次
 講師：H&H CONNECT株式会社 取締役 佐古卓人

佐古卓人 (さご・たくと) 岡山県津山市出身、実家は祖母の代から続く薬局。北海道で病院薬剤師として12年間従事し、オーダーリングシステムを独自開発・運用。2019年、ヘルスケアベンチャーに転職、2020年 H&H CONNECT 株式会社を設立。

座長より

特別講演1では、未来に目を向けましたが、基調講演では現在進行形のプロジェクトから薬剤師を再定義します。最初は、H&H CONNECTの佐古先生からのご講演です。病院薬剤師時代には、既存のシステムを導入すれば2億円近くかかるものを、パソコン代も含めて200万円でオーダーリングシステム開発を実現したという実績をお持ちです。



座長 浜田康次

講演要約

H&H CONNECTの佐古と申します。私は病院薬剤師として12年間勤務していました。情報伝達効率を向上させることでよりよい治療を実現したいと、独学でシステムを開発するうち、オーダーリングシステムの開発にまで至りました。それをきっかけに、ITヘルスケアベンチャーに転職、その後2020年にH&H CONNECTを設立しました。IT関連企業を経営していますが、今も薬剤師として、臨床だけでは解決できないことを外から解決に導くことを目指しています。

どんな剤形でもセット・検知可能なおくすりカレンダー

本日は開発中の「IoTおくすりカレンダー」についてお話します。薬局で服薬フォローアップが義務化されていますが、服薬状況の把握は、患者さんの主観的な情報に頼っているのが現実です。IoTおくすりカレンダーは、客観的な服薬データの取得を可能にします。図1に開発中の試作品が見られます。薬を取り出したことを検知し、そのデータをクラウドにアップ、薬剤師がリアルタイムで確認できるしくみです。

こういったものはすでにあるのではないかと思う方も多と思います。しかし、現場では、剤形も調剤方式も患者さんの管理方法も多種多様であり、既存の製品ではさまざまなパターンに適合できないものが多くはないでしょうか。

図2に既存製品との比較をまとめていますが、弊社製品は、大き

なゼリー剤やテープ剤もセットと検知が可能であり、ホッチキス留めから脱落しても検知できます。また、吸入薬や頓服薬は、別運用となる場合も多いのですが、頓服薬専用のポケットをつくりデータがとれるように設計をしています。

表面を透明にしているのも、正しくセットできているかチェックしやすく、処方変更の際の取り出しも簡単です。単3電池4本で約6か月の連続稼働が可能。AC電源ではないので設置場所も自由です。今運用中のおくすりカレンダーからオペレーションを変えずに運用できるように工夫しています。

データがあればよいのではなく、コミュニケーションが肝心

このIoTおくすりカレンダーで取得できるデータと早期介入のイメージについて説明します。取得できるデータは、セットした時間、つまり薬をポケットに入れた時間と、取り出した時間です。服薬していない場合にはアラートも出ます。たとえば昼食後の薬が13時までに取り出されていなければ、アラートが出ます。

介入事例を図3に示しています。私は化学療法を多く担当していたので、SOX療法の例を挙げています。図に記したように、「間違えて2回分服用しているかもしれない」「食後の薬を食前に服用しているかもしれない」など、データから可能性を見いだせます。

また、がん治療などでは指導された休薬条件に該当するか判断できず、取り出したりセットしたりを繰り返して、服用すべきかどうか悩んでいることが推察できるケースもあります。副作用対策薬の服用データも推察のヒントになります。そういう場合、薬剤師からアクションを起こして連絡を入れて相談にのるという介入もできます。

大切なのは、データに基づいて薬剤師がアセスメントし、直接コミュニケーションを取って、さまざまな問題を解決するということです。データがあればすべて解決できるのではなく、薬剤師をはじめ医療従事者がデータを活用していかに行動するかです。

IoTおくすりカレンダーは、現在、実証実験も計画しており、2022年冬頃のサービス開始を予定しています。皆さんのお役に立てればと思っています。



図1 / IoTおくすりカレンダーの試作品としくみ



図2 / IoTおくすりカレンダーと既存製品の比較

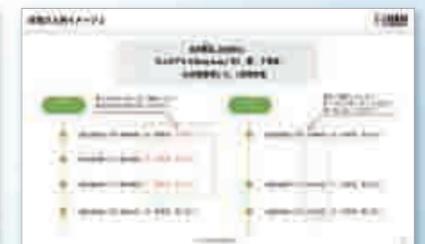


図3 / データを活用した早期介入イメージ



基調講演②

薬局で行う『脳卒中啓発・予防サービス』としての心電図測定事業
～「健康応援スポット」認証制度について～

座長：アポクリート株式会社 顧問/JACP 理事 浜田康次
講師：一般社団法人スマートヘルスケア協会 代表理事 岡崎光洋

岡崎光洋(おかざき・みつひろ) 東京薬科大学を卒業後、1997年同大学院薬学専攻博士課程後期修了。北海道薬科大学准教授等を経て現職。薬局利用者向けフリーマガジン「まちアポ」の制作、薬局検体測定室のモデルづくりなど幅広く活躍。

座長より

岡崎先生は、健康支援拠点としての薬局のあり方を早くから提案され、著書に『検体測定室ハンドブック 開設から運用まで』があります。現在は、秋田県医師会がすすめる人生観や死生観なども含む患者自身の想いを、多職種がクラウド上で情報共有する「ナラティブブック秋田」の運営に従事。多方面にご活躍の才能豊かな先生です。

講演要約

スマートヘルスケア協会は、未病対策や健康増進に関する啓発をしつつ、人々の健康につながる事業を作り出す活動をしています。本日はその中から、開始して2か月ほどが経過した、脳卒中の予防のための事業についてお話しします。

心房細動の啓発、早期発見で脳卒中を予防する

まず大きなポイントとなる2019年12月施行の「脳卒中・循環器病対策基本法」について説明します。この法律では、循環器病の予防や正しい知識の普及啓発の必要性、保健・医療および福祉に関わるサービス提供体制の充実などが定められています。これが成立する背景には、健康増進法により健康寿命の延伸やQOLの向上を目的とした施策が実施されながら、限局的な成果しか出ていないことがあります。健康寿命と平均寿命との間には依然として約10年の差があり、健康寿命の延伸は今後も重要な課題です。この状況下、我が国の死亡原因を見ると、23.2%が心疾患と脳血管疾患を合わせた循環器病であり、要介護となる原因でも21.2%を占めています。

脳卒中の一種である、心房細動による心原性脳塞栓は増加傾向にあります。心房細動は不整脈の一種で、脳卒中予防には、これをいかに早期発見するかが大きな課題です。日常生活での発見が大切ですが、病院ですでに病気になった人にしかアプローチができず、地域に開かれた薬局こそが担える仕事だと考えています。心房細動は心電計による発見が可能です。そこで、薬局来局者対象の家庭用心電計を用いた健康啓発事業を開始しました。

薬局でのアプローチで病気の理解や行動変容を促す

この事業の概要は図1に、実際の流れは図2にまとめています。家庭用心電計での測定後、必要であればかかりつけ医にトレーシングレポートを出し、かかりつけ医がなければトレーシングレポートを紹介状として受診してもらう。異常がなければ、注意喚起してご家族等にも伝えてもらいます。最終的に期待される効果は、特に高血圧治療を受けている方や60歳以上の高齢者であるご本人と、そのご家族が病院に行つて検査を受けるということだけではなく、自宅での測定体制を作ることや、病気について理解してもらうことです。

トレーシングレポートは、測定した本人から聞き取った既往症を転記するだけで、簡単に作成できるようなしくみにしています。実際の測定機器は、オムロンヘルスケアから2022年3月に発売されたものです。手を添えるだけで簡単に測定でき、出てくる結果は6種類です(図3)。

最初にこの事業を設計したとき、心電図を薬剤師が読むのかということを経験者から懸念されました。しかし「私達の目標は、心房細動を理解してもらって自分自身や家族の脳卒中リスクに備えられる人を育てることです」と各地の医師会で説明し、今では反対されることはありません。

秋田県薬剤師会では、健康サポート薬局30店舗で取り組みつつ店頭での評価を行い、1か月間データを取って、現在集計中です。その他、1日1,000人が来局するような大規模な薬局でもオペレーションは回っているという話です。

事業の質を一定以上に保つため、教育システムも完備しています。各薬局で1人、3.5時間のe-ラーニングで学んでもらい、「健康応援スポット(けんスポ)」という認証を出します。その認証を得た薬局でのみサービスの提供が可能です。健康寿命の延伸につながり、薬局に期待される健康サポートの推進もできるこのモデル、ぜひ皆さまの薬局で導入を検討していただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

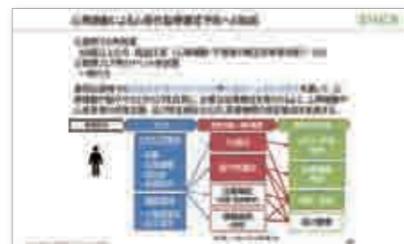


図1/薬局での心房細動による心原性脳梗塞予防事業の概要



図2/家庭用心電計を用いた薬局での測定・受診勧奨サービスの流れ



図3/家庭用心電計の測定手順と測定結果



基調講演③

ポリファーマシーの副作用発現リスクを評価するツール
～POLSETの臨床応用と有用性

座長：アポクリート株式会社 顧問/JACP 理事 浜田康次
講師：コスモス医薬情報AI解析研究所 所長 佐藤憲一

佐藤憲一(さとう・けんいち) 東北大学理学部卒業後、同大学院理学研究科に進み、1979年理学博士を取得。東北薬科大学(2016年より東北医科薬科大学)教授を長年務めた後、2019年にコスモス医薬情報AI解析研究所を設立。

座長より

佐藤憲一先生は、主な研究業績に、健康診断のデータを組み合わせることで甲状腺機能異常を予測するスクリーニング法の開発などがあり、『医療系のための情報リテラシー』という教科書も執筆され、多くの大学で採用されています。本日は、調剤現場で役立つ興味深いツールについてお話しさせていただきます。

講演要約

本日は、多剤処方による副作用リスクを評価するツール「POLSET」についてお話しします。

併用禁忌がなくても多剤処方では副作用の発現リスクが高い

多剤処方による副作用発現リスクの増加に関する数学的考察からは、「重複による場合は原因薬剤の数nに比例する」、また、「薬剤間相互作用(併用禁忌、併用注意)に起因する場合は相互作用のある薬剤数nのほぼ2乗に比例する」といえますが、複数の研究結果からは、前者の重要性が示唆されます。

また、214人の患者さんの処方箋について、副作用発現有無を聞き取り調査した結果の分析をお見せします(図1)。横軸は副作用の頻度の重みをつけて重複をカウントした「合計スコア」、縦軸は発現頻度です。いずれの副作用症状においても相関がかなり高く、横軸に重複する薬剤数を入れる場合とは大きく異なります。この214処方箋は併用禁忌ゼロ、併用注意も非常に少ないもので、それでもこれだけの副作用が発現するという事です。

これらから、多剤処方の副作用発現評価ツールでは、単剤での副作用発現頻度を原因薬剤につき加算したスコア(合計スコア)を評価すること、さらに、現場の薬剤師の意見を反映し、副作用情報として医療現場で使用されている医薬品添付文書情報を採用することを決定し開発しました。

ビジュアルでわかりやすく。処方変更サポートにも

POLSETでは、処方の全体でどんな副作用のリスクがどの程度

あるのか、ビジュアルでわかります。実例を見ていきましょう。まずは前述の合計スコアです。副作用症状別に、原因薬剤とそのスコアの内訳と合計が見られます。薬剤によっては、16剤処方よりも2剤処方の方が合計スコアが高いという場合も珍しくありませんが、POLSETを使えば処方薬の数に惑わされずに判断することが可能です。

転倒が起きやすい13剤処方から8剤に再設定したという事例での、13剤処方をPOLSETで照会したものが図2です。人体マップではかなりの範囲で赤くなっていて、あらゆる臓器で副作用発現リスクが高いことがすぐにわかります。右側では、各副作用症状の合計スコアの値がわかり、その詳細を見ると各原因薬剤のスコアがわかります。この情報をもとに、代替薬や減薬、減量の検討をし、変更後の処方もただちに図2のように表示できます。また、処方変更の前後での副作用スコアを一目で比較できる画面もあり、医師への提案でも説得力が出るでしょう。

もう1例、低血糖症状を風邪と勘違いした症例です。糖尿病、慢性心房細動、慢性心不全、高血圧、慢性腎臓病で内科を受診している患者さんですが、1週間ほど物忘れが目立ち、精神科を受診したということです。薬局で「少し汗をかいており、風邪をひいているかな」という話があり、ここから薬剤師が低血糖を疑い、7剤処方だったものを、内科、精神科双方の医師に情報提供と処方提案を行い、最終的に4剤処方とし、低血糖症状も物忘れも改善されたと報告されています。

この事例の7剤処方をPOLSETで分析した場合、図2と同様の画面では、重大な副作用の低血糖はピンクの網かけで表示されるので、仮に患者さんからの話を引き出せなかったとしても低血糖の副作用を疑うことが可能です。図3には、この事例での副作用症状別のスコアと腎臓に関連する副作用スコアの画面を示しています。

POLSETは、実際の調剤の他、経験の浅い薬剤師への教育ツールとしても活用できます。多方面で有効に活用いただければ幸いです。ありがとうございました。



図1/副作用発現アンケート調査の分析結果

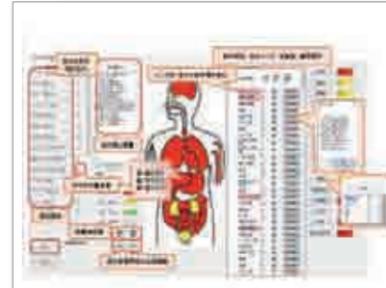


図2/ビジュアルでわかりやすいPOLSETの分析結果

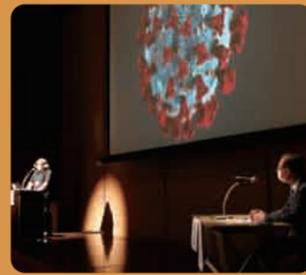


図3/POLSETの副作用症状別の画面表示

JACP 会員発表

薬局としてDX化・機械化への取り組み

冒頭で、座長を務める山村重雄氏(城西国際大学薬学部 特任教授/JACP 理事)が「コミュニティファーマシーに関わる者として、これからの薬局運営に対してどのようなアプローチがあり得るのかを一緒に考えていきたいと思います」とあいさつ。続いて3名の会員から、それぞれが携わる先駆的な取り組みについて発表していただきました。

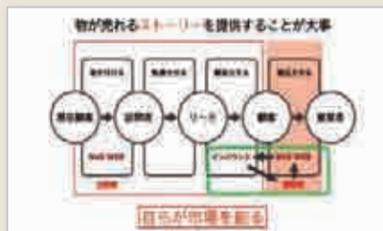


グリーンメディックの考えるDXと保険外サービス

一般社団法人豊中市薬剤師会
株式会社グリーンメディック
多田耕三

"Small × Digital"をキーワードに薬局を5店舗展開する多田氏は、DXで価値変容を実現することこそが重要だといいます。薬局に求められることが従来の保健医療の枠を超えて予防医療や健康の維持へと広がる今日、「これからの薬剤師のやることは(保健医療に加えて)予防医療と受診勧奨、その効果検証」になるだろうと多田氏は予想します。

そこでグリーンメディックでは図Aに示す「物が売れるストーリー」を意識した上で顧客との接点を構築。SNSや独自アプリを通じ、口コミ等によるインバウンドを発生させながら販売を拡大してきました。薬局を、病気の時だけに利用される場ではなく、そこに行けば利益が発生する「ポジティブなバリューを提供する場」に変容していきたいという目標を掲げているとのこと。



図A/物が売れるストーリー



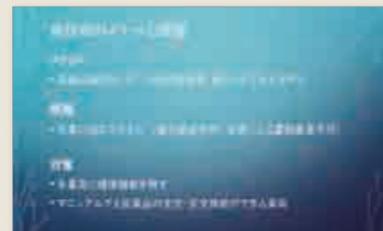
ドイツ薬局におけるDX化・機械化

セントラルアポテケ
JACP 理事
アッセンハイマー慶子

ドイツからリモートで参加のアッセンハイマー氏からは、コロナ禍におけるドイツの薬局の活動、そしてDXの導入についてレポートを寄せていただきました。

ドイツでは、EU共通のワクチン接種デジタル証明書発行やワクチン接種等が薬局の特別業務となり、地域住民への貢献ができたということです。

DXでは、各薬局でピッキングマシンの導入が進み、それによって生まれた時間で「お会計も、服薬指導も、患者さんとの無駄話もできます」とコミュニケーション向上への効果を紹介。さらに医療用医薬品のトレーサビリティ、全薬局共通の学術情報データベースなども整備され、9月には電子処方箋も導入されるとのこと。図Bのように、DX化によるメリットと有事対応整備の両面を考慮しておくことが大切だとの提言がありました。



図B/DX化・新技術のメリットと問題



和歌山県で初めてBD V maxを導入

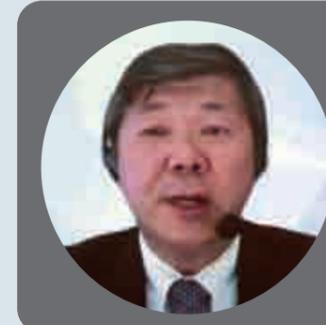
共和メディカル株式会社 薬局事業部
コンサルタント事業部
川原淳

共和メディカルの関西薬局和歌山店には、医薬品の入出庫をオートメーション化する薬局ロボット「BD Rowa Vmax」(図C)が導入されています。その活用実態について具体的なレポートをいただきました。

レセコン入力を完了してから、5種類で60秒前後という高速で薬剤が取り出し口に出てくるため、非常に効率化が進んでいるとのこと。入庫手順等をスライドで紹介、同機導入のメリットとしては、機械によるピッキングの正確さ、スピード、クリンネスの維持などがあり、中でも特に大きなメリットは、有効期限が迫る順にどのぐらいの在庫量があるかが一目瞭然でわかるという棚卸しの効率化だそうです。人の手で錠剤のカウントをしないことで、残業時間も大きく削減でき、肌感覚ながら薬剤師が患者と接する時間も他店舗に比べて長くなっているという報告でした。



図C/BD Vmaxの全体像・仕様



プログレスセミナー

インスリン自己注射患者への継続的なフォローアップに必要な視点と行動 ～スマートインスリンペンの可能性～

座長：株式会社フローラ 代表取締役/JACP 理事 篠原久仁子
講師：新潟薬科大学薬学部臨床薬学教育研究センター センター長・教授 朝倉俊成

朝倉俊成(あさくらとしなり) 新潟薬科大学卒業後、山之内製薬株式会社に入社。太田綜合病院・太田西ノ内病院薬剤部勤務を経て、2006年新潟薬科大学薬学部臨床薬学研究室准教授に就任、2012年同教授に。2020年より現職を兼務。

座長より

プログレスセミナーは、インスリンデバイス分野におけるDXとしてノボ ノルディスクの製品の紹介、さらに、新潟薬科大学で学生の指導をされながら、一般社団法人日本くすりと糖尿病学会の理事長として学術活動にも尽力されている朝倉俊成先生から、糖尿病薬物治療での薬剤師の役割についてもお話しいたします。



座長 篠原久仁子



講師 井戸根裕之

ノボ ノルディスクにおけるデジタルヘルスの取組み

講師：ノボ ノルディスク ファーマ株式会社 糖尿病肥満症事業本部
インスリンマーケティング部デジタルヘルスプログラムリード
井戸根裕之

井戸根氏からは、ノボ ノルディスク ファーマ株式会社におけるインスリン注入器の開発における歴史や特徴の紹介がありました。新製品のスマートインスリンペン(「ノボペン 6」と「ノボペン エコー プラス」)は、最後に注入ボタンを押した時の単位数と経過時間が表示されます。記録はスマートフォンに転送し、さまざまなメーカーの血糖管理アプリと連携できるということです。

講演要約

皆さんこんにちは。ウェブにて失礼いたします。糖尿病治療と薬剤師、スマートインスリンペンなどについてお話しします。

患者さんを生活者と捉えて総合的なフォローアップ

糖尿病の治療の目標は、単に血糖値をよくすることではなく、合併症発症・進展を防ぎ糖尿病でない人と変わらない日々を送れるようにすることです。よって、食事療法、運動療法、薬物療法等は全て、この目標に向かって行う血糖コントロール手段のひとつです。特に薬物療法では守るべきことが多くありますが、大きなポイントは、患者さん自身が生活の中で実践するという点でしょう。

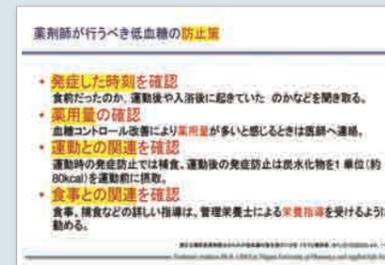


図1/薬剤師が介入して行える低血糖防止のポイント

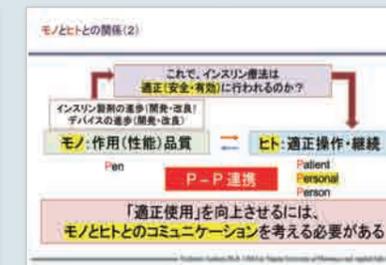


図2/モノとヒトとのコミュニケーションを考える

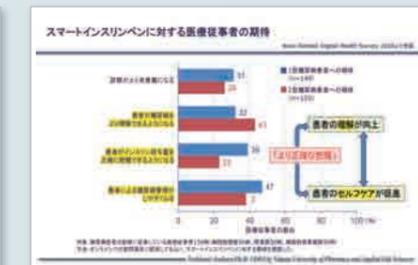


図3/スマートインスリンペンへの医療従事者の期待



未曾有のパンデミックに揺れたこの数年。JACP会員10組が、2020年来のコロナ禍における薬局機能のあり方に関する研究成果を発表しました。Webでも閲覧可能となった発表は高い関心呼び、感染症拡大下における薬局でのコミュニケーションの重要性があらためて認識されました。なおコミュニティファーマシーアワードは、区薬剤師会という大きな規模での活動を報告された保坂洋二氏(一般社団法人板橋区薬剤師会)に贈られました。

01



コロナ禍における健康サポート薬局・地域連携薬局としての取り組み

廣田憲威、橋本一代、作田一広(一般社団法人大阪ファルマプラン本部)、松村直美、津森美保、小笠美奈子(あおぞら薬局)、井塚めぐみ(そよかぜ薬局)、宇都宮節子(あおぞら薬局)、米山隆浩(すみれ薬局)、朝倉章昭(すずらん薬局)、北條雄也(なぎさ薬局)、上野ひとみ(もえぎ薬局)、伊戸舞美(あおぞら薬局淡路店)、山本京(あおぞら薬局三国店)、向井勝巳(かがや薬局)、中嶋公子(なつめ薬局)、向井都(こつま薬局)

コロナ禍において健康サポート薬局・地域連携薬局として実践した、地域住民や医療・介護機関への情報発信、ワクチン接種支援、副反応リサーチ、高齢者への孤立予防声掛けやフレイル予防など、多角的な取り組みを紹介した。

02



COVID-19治療薬(モルヌピラビル)供給における薬局の対応と、基幹薬局としての地域医療への貢献

加藤拓也、小原雛、土井上奈緒子、今田裕也、奈良優、田村翔平、谷口知明、門馬結希、澤谷亮平、土岐香織、小林順、齊藤達也(株式会社ユニスマイル新札幌中央薬局)

一度の服用量が多く、チャイルドロック包装で開封にも難があるモルヌピラビル服用に際して、処方箋発行元と連携して診察時点を含ま処方フローを確立。電話を繋いで実際に開封を体験してもらうなどの配慮で、アドヒアランス低下を防いだ取り組みを報告した。

03



コロナ禍におけるリウマチ患者の治療継続のための専門医と保険薬局の連携

須藤真由子、渡邊隼太、秋山恵美子(ファークロス薬局イルカ)

緊急事態宣言下、免疫疾患患者に対して「0410対応」にて処方箋対応。受診が遅れている患者に対し電話にて体調確認や受診の促しを行い、医療機関で注射を行っていた患者には薬局店頭で手技を指導し自己注射へ変更。患者の病態維持、負担軽減に貢献した。

04



コロナ禍でのJACP活動報告2020-2022

末澤克己、アッセンハイマー慶子、篠原久仁子、浜田康次、大森由子、服部益治、山村重雄、島田光明、城戸真由美、乾賢一、吉岡ゆうこ(JACP)

2020~2022年の活動を振り返り、各種情報発信や調査研究、学会発表等、コロナの影響を受けたからこそ変化してきた活動内容や生み出すことのできた革新的成果を整理した。「グレートリセット」が起きつつある現代において、貴重な記録となった。

05



ドラッグストアにおけるコロナ禍の対応

松尾宗一郎、小杉知之、森下寛士、深津英人、北原洋平、呂瀬誠(株式会社杏林堂薬局)

調剤併設型ドラッグストアとしてコロナ禍で果たした役割を「急激な需要変動対応」「従業員の感染予防とシフト調整」「患者接触スペース設置に伴う店内構造変更」「無料定性抗原検査対応等に伴う薬局の新たな付加価値」の4点にわたり後ろ向き調査を行った。

06



コロナ禍における無菌室共同利用のための事前研修ビデオの作成

大森由子、富永由美、田畑由宇(ネオプラスファーマ株式会社、虹薬局南千里店)

無菌調剤室の共同利用契約における利用者(薬剤師)事前研修。その教材ビデオを作成し、研修をzoomで行った内容をレポートした。「地域連携薬局」の認定が始まり設備の共同利用が進んでいく上で、業業連携を見据えた地域のセーフティネットの構築が進む。

07



THE コロナギフト ~地域医療への目覚め~

會田一恵、三森由雅、池田成美、菅井嘉江、長谷川恵(泉ライフ薬局)

コロナ禍における各所との連携の中で、地域住民の健康な生活を確保するために小さな工夫を重ねながら苦闘してきた記録を報告した。薬物療法のみならず、療養生活全般の不安解消に向けた活動は、連携各機関の医療従事者にも安心感をもたらした。

08



一般社団法人板橋区薬剤師会における新型コロナウイルス感染拡大防止に対する取り組みについて

保坂洋二(一般社団法人板橋区薬剤師会)

ワクチン接種事業の支援ならびに自宅療養者への医療支援強化事業協力について報告した。ワクチン調製の練習キットを作成して不慣れた薬剤師の不安を軽減し、かかりつけ薬局をもたない自宅療養者には薬剤師会事務局で薬局を斡旋するなど細やかな工夫を行った。

コミュニティファーマシーアワード 受賞

09



埼玉県PCR検査等無料化事業に参加して、今、強く思うこと~コロナ禍のコミュニティファーマシーの役割~

厚川俊明(厚川薬局、株式会社ファミーコ厚川)

2022年1月から参加した県のPCR検査等無料化事業活動をレポートした。薬局内での感染防止を見据えた動線確保やひっきりなしの電話対応、医療機関や保健所にアクセス不能となった患者のフォローなど、多くの反省点を元に今後の他機関との協働に地域貢献の鍵を見出す。

10



新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延期における薬局実習と地域連携薬局の取り組み

篠原久仁子(株式会社恵比寿ファーマシー、株式会社フローラ、JACP)、山下康也(株式会社恵比寿ファーマシー、株式会社フローラ)、棚澤梨花(明治薬科大学)、杉本絵理歌(東京薬科大学)、齊藤凌、宇田川宣子(株式会社フローラ)、梶山晶大(株式会社恵比寿ファーマシー、株式会社フローラ)、吉岡ゆうこ(株式会社恵比寿ファーマシー、JACP)

コロナ禍での薬局実習生受け入れや、効果的な服薬指導法等を調査。薬局実習は定期的な検査と感染対策で安全な実施が可能であることを認め、服薬指導はオンライン指導が対面に対し高い満足度を得た一方、電話による指導は満足度を下げた結果となった。

NIPRO

ニプロは、います。
世界のみんなの命のそばに。

新領域に果敢に挑み、
さらに多くの人々に信頼される NIPRO をめざしています。

Medical supplies for the world population

ニプロ株式会社
〒531-8510 大阪市北区本庄西3丁目9番3号
2021年8月作成

ブース出展企業

さまざまな企業の協力により、薬局業務の効率化に資するシステムや、患者さんとのよりよい関係構築に役立つ製品など、薬局に役立つモノが並びました。未来の薬局を考える上でのヒントにもなる展示となりました。



株式会社TRIB 生命情報医学研究所
新型コロナウイルスの抗原検査キット、物流ネットワークを活かした迅速なPCR検査サービスの紹介



天野商事株式会社
調剤薬局向けヘルスケア商材を、季節や店舗特徴に合わせて什器・POPとセットで提案するサービスを案内



株式会社ウエルアップ
イベントや来局促進に使える「脳年齢計」と「自律神経チェッカー」を体験できるデモンストレーション展示



株式会社大塚製薬工場
経口補水液「オーエスワン」を各種エビデンス資料と共に展示・紹介。2022年7月新発売のアップル風味も



株式会社カケハン
薬局DXのトータルサポートシステム「Musubi」。特に服薬期間中フォローのサポート機能を重点的に紹介



株式会社グッドサイクルシステム
iPadを活用した電子薬歴「GooCo」、オンライン服薬指導と服薬フォロー支援ツール「Followcare」の紹介



テルモ株式会社
家庭用血圧計・血糖測定器、尿たん白・尿糖の自己検査試験紙等、家庭での健康管理を可能にする製品を展示



株式会社中村・フクイヤ
ナノダイヤモンド触媒を活用した店舗・オフィス等の抗ウイルス施工、機材・備品に使える施工用スプレーを紹介



(一社)日本コミュニティファーマシー協会
かかりつけ患者用お薬手帳、地域住民と薬局をつなぐ冊子「Sup?」、薬局活用ハンドブック、貼付ステッカー等を紹介



ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
2022年2月に発売を開始したスマートインスリンペン(ノボペン 6、ノボペン エコー プラス)を展示



東日本メディコム株式会社
処方変更内容を印刷して渡せるなど、患者さんとの信頼関係を構築できる対面型薬剤情報システムの紹介



株式会社ユヤマ
自動散薬秤量機と採用薬品変更時、その場で錠剤カセット作成ができるVC付全自動散薬(錠剤)分包機を紹介



株式会社レイヤード
薬局での待ち時間対策、物販促進、患者教育のできるデジタルサイネージシステム・コンテンツを紹介

WEB広告出稿企業

「第9回コミュニティファーマシーフォーラム」の開催趣旨に賛同の上、広告出稿を行っていただいた企業を紹介します。一部の企業からは動画CMの提供もあり、フォーラム開催前後に流して、多くの参加者が視聴することができました。

株式会社MICIN (マイシン)



わたしたちは、テクノロジーと仕組みで医療の可能性を広げていきます。すべての人が納得して生きて、最期を迎えられる。そんな世界を作っていきます。

Central Apotheke



コロナ禍中、地域住民に医薬品はもとより安心と勇気を与えるのがドイツの「いきつけ薬局」です。日本人薬剤師の薬局として、日本の良さをドイツに、ドイツの良さを日本に伝える仕事もしています。

味の素株式会社 静岡営業所



“おいしい・やさしい・あたらしい減塩”をコンセプトとする“Smart Salt (スマ塩)”プロジェクト。訴求動画の発信、レシピ紹介、体感キャンペーン、新聞広告など、幅広く情報発信をしています。

一般社団法人大阪ファルマプラン



1990年にあおぞら薬局を開局、患者様や共同組織・地域の方々と共に「いのちの平等」「非営利・協同」「安心して住みつけられるまちづくり」をすすめ、民医連保険薬局として地域医療に貢献しています。

大塚食品株式会社



時代の一步先を行く画期的なアイデアで“新しい食”を創出し、ナチュラルフードテックカンパニーとして、人々に健康とその先にある喜びや幸せをもたらすことができる企業を目指してまいります。

大塚製薬株式会社 ニュートラシューティカルズ事業部



ニュートラシューティカルズは栄養=ニュートリションと医薬品=ファーマシューティカルズを組み合わせた言葉。医薬関連事業で培われたノウハウと、科学的な根拠に基づく独創的な製品を開発します。

オムロンヘルスケア株式会社



世界中どこにいても、必要ときに、簡単に、健康をサポートする商品やサービスを手に入れられる。All for Healthcare 私たちは、そんな世界の実現に向けてチャレンジし続けます。

株式会社くすりの窓口



当事業は、お客様のニーズからスタート。患者様と医療・介護福祉すべてをつなぐプラットフォームを構築し、患者様はもとより、ご協力いただくクライアント様の生産性向上に寄与してまいります。

太陽化学株式会社



70年の歴史をもつ食品素材メーカーです。特に「サンファイバー」は豊富なエビデンスと安全性で全国の医療・介護施設で採用され患者様の排泄ケアや術後の栄養サポートに幅広く使われています。

ドイツ薬事博物館



JACPは、ドイツ薬事博物館の賛助会員です。ハイデルベルク城内にあるドイツ薬事博物館は、医薬の歴史資料を集めた博物館であり、JACPのドイツ薬学視察旅行では必ず訪れる場所です。

東武トップツアーズ株式会社



東武トップツアーズは長年ドイツ薬学視察旅行の企画・実施しております。旅行会社ならではのきめ細やかなホスピタリティを通じて、私たちにしか提供できない価値を創造してまいります。

株式会社トーショー



株式会社トーショーは錠剤分包装機、散薬分包装機を中心に病院・調剤薬局の設備や機器の発展に携わってきました。刻々と変化する医療現場の未来を見据え、より良い調剤業務を支援して参ります。

ネオフィスト研究所



当研究所は20年間、調剤の技術・薬歴記載・患者とのコミュニケーション・在宅医療・薬局経営の研修に挑戦してきました。コロナ禍のなか、研修をオンラインへとシフトさせています。

森永乳業株式会社



乳にこだわる森永乳業の大人のためのプロテイン「タンパク生活」は、消化吸収性が高い乳性たんぱく質を使用した粉末で、溶かしやすく無味無臭、日常生活の中で手軽にたんぱく質を摂取できます。

株式会社ユニケソフトウェアリサーチ



医薬品情報をベースとした保険薬局向けのソフトウェア開発と販売を通じて、商品・サービスでお客様の満足を超えた感動を提供し、社会貢献と関係者の幸せを目指しています。

フォーラム協賛企業

株式会社TRホールディングス
アポクリート株式会社
株式会社杏林堂薬局

ニプロ株式会社
ネオプラスファーマ株式会社
株式会社フォーリーフ

株式会社マスカット薬局
株式会社メディカルリンク
株式会社ユニスマイル

フォーラム宣言 | 最後にJACP関西支部事務局長の末澤克己より「フォーラム宣言」が発表されました。

第9回コミュニティファーマシーフォーラム宣言は、「グレート・リセット～DXの活用で連携の深化を～」です。

昨年のフォーラム宣言は「コロナに負けず、連携からタッグへ」でした。afterコロナではなく、withコロナの時代となりそうです。コロナと共存しながらDXを進めていかなければなりません。今回のフォーラム宣言はフォーラムのメインテーマである「グレート・リセット」そのものにしました。薬剤師・薬局に関するあらゆるものをリセットし、再起動、あるいは再構築させていこう…という意味です。そして個々の薬剤師により、リセットする項目はさまざまあると思いますが、それを考え実行していこうというものです。

DXを活用して、さらに連携を深めていこう(深化)を合言葉に、次の1年間の行動の規範にしたいと思います。



JACP 2021～22年の 活動報告



2021年9月●ApoBittle! Vol.8発行



2021年9月●第3回薬局団体連絡協議会シンポジウムを他3団体と共同開催 (WEB・東京)



2021年9月●第7期・第5回CP研究会 (WEB) 講師はRoss Tsuyuki氏



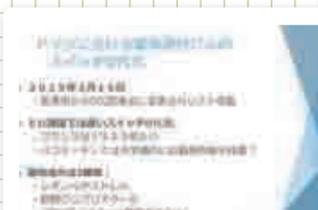
2021年10月●第7期・第6回CP研究会 (WEB) 講師は深井克彦氏



2021年11月●第7期・第7回CP研究会 (WEB) 講師は山村重雄氏



2021年12月●第7期・第8回CP研究会 (WEB) 講師は吉岡ゆうこ氏



2022年1月●第1回ワールドフォーラム (WEB) 講師はアッセンハイマー慶子氏



2022年2月●薬局の見せる化～店舗扉等の貼付ステッカー作成販売



2022年3月●第8期・第1回CP研究会 (WEB) 講師は吉岡ゆうこ氏



2022年4月●第8期・第2回CP研究会 (WEB) 講師は古川裕之氏



2022年5月●第8期・第3回CP研究会 (WEB) 講師は安倉史氏



2022年6月●地域健康生活支援セミナー2022 (WEB) 講師は谷口英喜氏と鈴木伸悟氏



2022年7月●JACP第9回コミュニティファーマシーフォーラム (ハイブリット) を開催



体が知ってる大切な水と電解質



軽度から中等度の脱水症に。経口補水液 OS-1 オーエスワンシリーズ



POINT 1
消費者庁から許可された特別用途食品個別評価型病者用食品です。



POINT 2
乳幼児から高齢者の軽度から中等度までの脱水症に適しています。



POINT 3
感染性肺炎・感冒による下痢・嘔吐・発熱、高齢者の経口摂取不足、過度の発汗を原因とした脱水症にご利用ください。



POINT 4
脱水を伴う熱中症にもご利用いただけます。



POINT 5
オーエスワンゼリーは、しゃく・えん下困難な場合にも用いることができますが、医師とご相談の上、ご利用ください。

〈オーエスワン/オーエスワン アップル風味/オーエスワンゼリーが許可を受けた表示内容〉

オーエスワン/オーエスワン アップル風味/オーエスワンゼリーは、脱水症のための食事療法(経口補水療法)に用いる経口補水液です。軽度から中等度の脱水症における水・電解質の補給、維持に資した病者用食品です。下記の状態等を前提とした脱水症の悪化防止・回復、脱水症の回復後も下記の状態等における水・電解質の補給、維持にご利用ください。

●感染性肺炎、感冒による下痢・嘔吐・発熱 ●高齢者の経口摂取不足 ●過度の発汗
また、脱水を伴う熱中症にもご利用ください。

〈さらにオーエスワンゼリーが許可を受けた表示内容〉

オーエスワンゼリーは、しゃく・えん下困難な場合にも用いることができますが、医師とご相談の上、ご利用ください。

〈摂取上の注意〉

下記の1日当たり目安量を参考に、脱水状態に合わせて調整量にてお飲みください。

学童～成人(高齢者を含む)	500～1000mL(g)/日
幼児	300～600mL(g)/日
乳児	体重1kg当たり 30～50mL(g)/日

*gは、オーエスワンゼリーのみを基準する。

医師から脱水症の食事療法として指示された場合にお飲みください。医師、薬剤師、看護師、管理栄養士、登録栄養士の指導によってお飲みください。食事療法の薬材として表すものによって、多く飲むことによって脱水症が治癒するものではありません。

病者用食品とは、特別用途食品のうちで特定の疾病のための食事療法上の期待できる効果の根拠が医学的、栄養学的に明らかにされている食品として消費者庁が許可した食品です。

OS-1 LINE
公式アカウント
友だち募集中!



友だち追加はこちら

- 季節に応じた脱水に関する情報をチェックできます。
- 【夏】シーンに応じたおよその発汗量
- 【冬】感染症情報
- 脱水症、OS-1に関する情報が取得できます。
- 天気や気温に関わる情報が取得できます。

詳しい商品情報



公式サイトはこちら

販売者 株式会社大塚製薬工場
販売経路 大塚製薬株式会社

OS-1に関するお問い合わせ先
(株)大塚製薬工場 お客様相談センター
☎0120-872-873